

## 人の罪を負い、赦すために 来られたイエス・キリスト

ヨハネ8章1～11節  
2021年2月14日  
松田 基子 師

神様の、私達人類に対する愛、それは私達人間が計り得ないものです。神様は御自身の御心、ご計画に背いて、自らを神として、自己中心に生きる人間に対し、即座に滅ぼしてしまう事をなさらず、御自身に立ち帰らせるために人類救済計画を立てられ、一人でも多くの方が、滅びから救われて、**神様の御許に帰って来る**ようになさいました。神様は御自身に背いた人間に、繰り返し立ち帰るチャンスをお与えになりました。その神様の**愛の御心を表すためにイエス様は**、神の子の位を捨てて、この世に全き人となって生まれ、神様の**愛を**、御自身の全存在をもって**示されました**。

イエス様による神様の愛の表れを、最も良く表した言葉は、ヨハネ福音書、3章16節です。

「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**」この御言葉には、人間の命の親としての、神様の人類に対する、愛して止まない、溢れる愛が示されています。しかし、そこには、

「**独り子を信じる者が一人も滅びないで**」と言う**但し書き**があります。神様は、全ての人間を愛しておられ、全ての人が神様に立ち帰るように、御子をお与えになりました。但し、御子イエス・キリストを**信じる者**でなければ、永遠の命、即ち、神様の御許で、永遠に**保証されることはない**と言うことです。

しかし、神様はそこに、イエス・キリストを**信じる者**という、イエス・キリストによって、神様に**立ち帰れる、法外な恵み**をお与えになりました。

その恵みについて、3章17節に、  
「**神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるた**

**めである。」**

と、神様の御心が示されています。ところで、聖書に示された世界の歴史は、時間と言う流れの中に置かれました。時間というのは、直線であり、有限です。**始めがある**と言う事は、必ず、**終わりがある**と言うことです。聖書は、創世記で始まり、ヨハネの黙示録で終わっています。黙示録の22章には、キリストの再臨が記されています。キリストの再臨によって、世界は**正しく裁かれ、歴史は終結し、永遠の神の国の世界が出現する事**を教えています。

再臨のキリストは、世を**裁くために**、再び地に立たれるのですが、二千年前、全き人の子となって、この世に来て下さった時のイエス様は、**人に赦しを与えるために**、この世に生まれて来て下さいました。そのイエス様の使命が、**赦しにある事**を示しているのが、今朝の聖書箇所、ヨハネ8章1節から11節までの記事です。

ヨハネ7章において、イエス様は仮庵祭の半ばから、エルサレムに来ておられました。そして、神殿の境内で、人々に神様の御心を教えられました。民衆はイエス様にメシア、救い主であることを期待しましたが、宗教指導者達は、イエス様の存在を苦々しく思い、殺そうとまで、思っていました。それは、イエス様が、神殿の境内で、神様そっちのけで商売をしている人々を追い出されたり、安息日に病人を癒されたり、律法を守らない人々と一緒に食事をされたり、それらは、宗教指導者達にとっては、律法に違反することであり、彼らにとってイエス様は、赦されざる危険な存在でした。その上に民衆が、イエス様を慕って行くことは、不愉快で腹立たしい限りでした。

何とかして、

『イエス様に罪の理由を付けて  
殺してしまいたい。』

そうしないではおれない憎しみが、彼らの心を支配していました。そのような悪意で、彼らは一つに事を計画して、イエス様を訴える**口実作**

りを計画したのです。ヨハネ福音書8章1節を見ますと、

「イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆は皆、御自身のところへやって来たので、座って教え始められた。」

とあります。オリーブ山はエルサレム神殿と谷を隔てた所にあります。巡礼者達の休み場でもあったようです。イエス様が朝早く神殿に上って行かれますと、そこにはもっと早くから、イエス様が来られるのを待ち受けていた人々がいて、彼らは御許に集まって来ました。

彼らはイエス様の命と愛に溢れた言葉に、魂の渇きが癒されました。その体験はイエス様の言葉に飢えて、御許に行かずにはいられませんでした。言葉は生きています。イエス様の言葉には、愛と命が宿っていましたから、それを真剣に素直に受け入れた人々は、感謝と喜びに溢れ、生き生きとした生き方に代わりました。しかし、また、言葉は使い方を誤ると、人を殺す凶器となります。そのような言葉をもって、やって来た人達がいました。

イエス様に対する憎しみに燃えた、宗教指導者達です。それは、律法学者達や、ファリサイ派の人々でした。彼らは、

『神様から選ばれ、律法を与えられた。』と、誇りながら、神様の前に遜ることなく、自分達が神様に代わって、モーセの座に着いて、律法を振り回し、人々を計って、断罪していました。

彼らは、イエス様を評して、  
『神殿を荒らし、安息日を守らず、  
神様を父と呼ぶ、不遜で危険な人物』  
だと思い込んでいました。

『自分達が成敗しないでどうする。  
何とかして訴える口実を作らなければ』  
と、彼らの考えた計画によって、一人の女性が連れて来られました。

『姦通の現場で捕らえられた』  
と言うのです。それは律法学者や、ファリサイ派の人々が、

『たまたまそれを知る事になった』  
と言うのではなくて、彼らがイエス様を訴える  
『口実作りのために、  
彼らが仕組んだ罠であったであろう』  
と推測されます。

それと言うのも、彼らとその女性を、イエス様  
が人々に教えておられる真ん中に立たせると、  
4節に、イエス様に向かって、  
「先生、この女は姦通をしているときに  
捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、  
モーセは律法の中で命じています。  
ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」

と問いかけています。彼らの悪意以外の何ものでもありません。彼らは律法を振りかざして  
いますけれども、該当する律法では、  
申命記22章22節に、

「男が人妻と寝ているところを見つけられた  
ならば、女と寝た男もその女も共に殺して、  
イスラエルの中から、悪を取り除かねば  
ならない。」  
とあります。

どうして、女性だけが連れて来られ、男性は  
いないのでしょうか。明らかに罠であった可能  
性が高いと思われれます。彼らはこの女性の命  
の重さなど、少しも考えてはいません。自分達  
の目的を果たすための道具としか、考えていま  
せん。6節を詳訳聖書で見ますと、

「これは彼らが、イエスを試す(試験する)ため  
に言ったことであった。彼らはイエスを訴え  
る理由が見つかれば良いと思っていたので  
ある。」  
とあります。彼らはこの女性を利用したのです。

その時イエス様はどうしておられたでしょうか。  
「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き  
始められた。」

とあります。イエス様が何を書いておられたの  
か、聖書の言葉を、色々と想像する人もいます  
が、ある人は、

『イエス様は、群衆のその女性に対する裁き

の視線を、御自身の方に向けさせようと、彼女が立たされていたのに対して、かがみ込んで、何かを書かれることで、人々の視線を彼女から、ご自身の方に、向けさせられた。』と言っています。

イエス様は何もお答えになりません。律法学者たちと、ファリサイ派の人々は、そんなイエス様の態度に苛立ち、しつこくイエス様に答えを迫りました。彼らの思惑としては、

『民衆がイエス様を愛の人として慕っていることに、我慢がなりません。』

『何が愛だ、神の律法に違反する事をしておきながら、赦されるべきではない。イエスはきっと、この女性に、石を投げる事を止めさせるだろう。そうすれば、律法違反者として、訴えることが出来る。』

それが、彼らの目論見でありました。

彼らはその答えを求めて、しつこくイエス様に迫りました。そこで、イエス様は身を起こして言われました。7節に、

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、先ず、この女に石を投げなさい。」

そう言われると、また、イエス様は屈み込んで、地面に何かを書き始められました。イエス様の言葉には権威がありました。人として、生まれ、生きて、罪を犯したことの無い人が居るでしょうか。自分の罪に目を向けないで、他人の罪を捜し歩いて告発する。それは神様の前に遜ることなく、自分を正しいとして、自分を神としているからです。イエス様のこの言葉は、人々の良心を突きました。9節を詳訳聖書では、

「彼らはイエスの言葉に耳を傾け、それから、良心を責められて、老人から始めて、最後の一人まで、一人ひとり出て行き始めた。」

と記されています。

人は誰も、人の悪を思わず、不平不満、呟きの微塵もない、そんな日を1日たりとも送ることはできません。神様はその心を見ておられます。年長者は生きて来た日数が多いだけに、

罪の多さを隠すことは出来ません。イエス様の言葉に、年長者から一人、また一人と列を成して去って行きました。しかし、彼らはここで、イエス様からせつかく、自分の罪に気付かせて頂いたのに、何故イエス様に、赦しを求めなかったのでしょうか。

そこに、人の心の頑(かたく)なさがあります。律法と言う物差しを使って、人の罪を計ってきた人々は、それまでの自分の生き方を捨てる事が出来ませんでした。彼らはイエス様の前に立ったその時は、イエス様の言葉に罪を示され、自覚せざるを得ませんでした。自分の家に帰ると、また元の頑(かたく)々な、自己を正しいとする心に戻り、いかにして、イエス様を殺すことが出来るか、自分に否をとる存在を、抹殺しないでは心が納まりませんでした。それが**罪に支配されている人間の姿**です。神様は、悔い改めのチャンスを与えておられるのに、それを人間は拒否し続けるのです。

一方イエス様の赦しに生かされた人がいます。人々は立ち去ってしまい、イエス様と、真ん中に立たされた女性だけが残りました。イエス様は身を起こして立ち上がり、女性に声を掛けられました。

「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。」

「だれもあなたを罪に定めなかったのか。」

本来、罪ある人間がどうして、他者を罪に定めることが出来るのでしょうか。人間を罪に定める事が出来るのは、罪の全く無い、神様とイエス様だけです。自分の罪を示された人々は皆、立ち去って行きました。そこで、

女性はイエス様に、

「主よ、だれも(ありません)」と

答えました。するとイエス様は、驚くべきことに、

「わたしもあなたを罪に定めない。

行きなさい、これからは、もう罪を

犯してはならない。」

と、愛の眼差しで、彼女の心に、深く語り掛けられました。

イエス様は、8章15節で、ファリサイ派の人々

に対して、

「あなたたちは肉に従って裁くが、  
わたしはだれをも裁かない。」

と言っておられます。ヨハネ3章17節の  
御言葉は、

「神が御子を世に遣わされたのは、  
世を裁くためではなく、御子によって  
世が救われるためである。」

でありました。イエス様は罪を赦す権威をもつて、この世に来られ、信じる者に赦しを宣言されました。しかしここで大事なことは、イエス様は姦通の女性に、確かに

「あなたを罪に定めない」

と言われましたが、それは決して、

『罪をうやむやにされた。』

と言う事ではありませんでした。イエス様がこの世に人となって来られたのは、御自身の身に、人類の全ての罪を負って、十字架に架かられるためでした。

罪を負って下さった方によってしか、

『罪の赦しは得られません』

イエス様はご自身の命と引き換えに、赦しを宣言されたのです。しかし、なぜ、それ程までなさったのでしょうか。それは御自身によって神様に立ち帰らせ、永遠の命を得させるためです。イエス様は、女性に、

『行きなさい。罪と決別した、

神様に従う道へと出発しなさい。』

と押し出されました。

パウロは、第二コリント6章2節で、

「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」

と言っています。人となられたイエス様は、御自身を信じる、全ての人の罪を赦されました。私達は今、イエス様に依る、罪の赦しが与えられる神様の大きな恵みの中に生かされています。しかし、それは、何時迄もと言う事ではありません。今日という恵みの時、救いの日に、イエス様が十字架の上から語り掛けられる、

「わたしもあなたを罪に定めない。

行きなさい、これからはもう、罪を

犯してはならない。」

の御言葉に従う事です。

私達は、地上の旅路に於いて、その御声を聞きながらも、弱く、繰り返し、罪を犯してしまい、自分に失望します。しかし、イエス様は何と言われているのでしょうか。

マタイ18章21節～22節で、ペトロが、

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか。」と尋ねた時に、イエス様は、

「7回どころか7の70倍までも赦しなさい。」と言われました。それは、イエス様が、今の時は、何度もわたしたちに、立ち帰るチャンスをあたえて下さると言う事です。私達は、イエス様の罪の赦しの宣言を聞く以外に、魂の平安を得ることは出来ません。

イエス様の赦しの言葉に励まされて、日々主を見上げ、日々悔い改め、永遠の命の道を歩んで参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様  
あなたの愛と、憐れみの大きさは  
罪深い私達には計り難く。  
唯ただ、感謝に溢れます。

滅ぼされるべき、私達を憐れみ、  
御子イエス様の贖いまで与えて、御自身に立ち  
帰る機会を繰り返し与えて下さる、  
その恵みに感謝が溢れます。

この尊いご愛に答え、日々悔い改め、  
直すら天を見上げ、イエス様に倣い、  
従う者として下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。